

前号から対話の実際を取り上げています。対話を始めるためには、自分の事情を相手に伝えてみよ
うという気持ちになっていることが必要です。端から自分の話を否定されてしまうところでは、対話
の窓は閉ざされてしまいます。そうならないためには、相手が言ったことは話の前提として受け入
れることです。つまり否定しないことです。

疑いも、矛盾の指摘も、否定になりうる

いつも提出期限を守れない学生がいるとします。本人は「途中ま
では憶えていたんですけど・・・」と言います。ここで「言い訳するな！」と
言いたくなるかもしれませんが、そこまで頭ごなしに否定しないとして
も、「それは本当ですか？」と疑いの目を向けたくなるかもしれません。あるいは「いつまで憶えていたのですか？今はどこに置いてある
のですか？」など言葉巧みに話の矛盾点を探ろうとしたくなるかもし
れません。いずれにせよ、自分の話が真剣に受け取られていないとわ
かれば、学生はそれ以上話そうという意欲を削がれるでしょう。

そもそも、このタイプの学生は記憶が曖昧なので、ごまかすつもり
がなくても、様々な角度から質問されると話が矛盾してきてしまうも
のです。



対話の前提として受け入れるなら

「途中までは憶えていた」という学生の話に対話の前提として
受け入れるなら、そこから導かれる話題は、たとえば「どうやって
スケジュール管理をしているのか」でしょうか。

予定やタスクが入ったらカレンダーアプリに入力すること、すべ
ての予定やタスクを一つのカレンダーに集約すること。これらは
有効なスケジュール管理方法ですが、有効だからと言ってみんな
が当たり前に行っているとは限りません。もしかすると学生は、頭
で予定を憶えようとしていたり、予定を書いたメモが複数の場所
に分散していたりするのかもしれません。

自分にとっての当たり前は、対話においては相手への提案にな
りえます。この文脈でなら「いつまで憶えていたのですか？」とい
う質問も有意義でしょう。学生に利用可能なスケジュール管理方
法を模索する手掛かりになるからです。

